

「本館には、君の望む魔法研究をするに十分な施設も器具も、何より重要資料も揃っている。そこで君の野心を発揮して、大いに探究に励んでほしい」

この分館とは比べ物にならない広さを持つ、本館での研究——。

それは、この分館にいる学生にとっての夢そのもの。

もちろん、ロインだってそうだ。「価値を見出す視点が面白い。私の論文を網羅してくれているということもありがたい。良き研究者となって、この学園を支えてくれたまえ」

デニスの言葉に、ロインはわなわなと震えた。

信じられない申し出だった。本当に夢かと思う。しかし夢ではない。誰にも悟られぬようつねった手の甲の痛みは本物だ。

ぜひ——ぜひ！

しかし、またも邪魔をするのは教授である。ロインが口を開くより早く、

「デ、デニス副学園長。それはちょっといくらなんでも突然すぎではありませんか？」

教授が慌てたように言った。

「そういう特例的な引き抜きというのは、方々からの反感を買ってしまいますよ？」

「うむ。言われてみたら確かにそうだな」

「ほ、他の学生に何と説明したらいいのですか？ 彼らにとって本館行きは悲願だ。ロイン君だけ特別扱いというのは——」

そして教授は、ロインにとって最も「言ってほしくないこと」を口にする。

「そもそも彼は、本館に所属するための試験に落ちたからこそここに

いるんですよ!？」

ロインはうつむいた。そうだ。だから自分は分館にいる。自分は試験に失敗し、本館に「行けなかった身」なのだ。

——自分はやはり、ここにいるべき人間だ。

いなければならない人間なのだ、ロインは暗い顔をした。

——だが。

次に放ったデニスの一言は、ロインの深い悲しみも、教授の執拗な反論も、それこそ魔法のように、たちまち鎮めてしまうのだった。

「教授」

デニスは子供に言い聞かすように、静かに微笑んで、

「試験は現状の学力を計るものに過ぎない。私のスピーチをお聞き頂けましたかな？ シェンティア設立に込められた想いを。人種差別のない平等な世を願って設立されたのがこのシェンティアであり、ネイクス大陸に限らず学問と研究の機会を与えるための分館だ。ここにいるのは皆同じシェンティアの学生。本館、分館と優劣をつける必要がどこにある？ 何より、私は彼の志が本館に来るのにふさわしいと判断したまでだ」

ぽかんと固まる教授に向けて、デニスは白い歯を見せた。

「他の学生にはあなたからうまく伝えてくれ。あなたは准教授時代から弁が立つ」